

2022. 7. 17. 主日礼拝説教
聖書： ルカによる福音書21章 1～4節
列王記上17章10～16節
『やもめの献金』

この聖書の箇所は、要約すれば「義とされるのは、多寡ではない。捧げる人の心(誠意)なのだ」ということですが、「このやもめは、乏しい中から持っている生活費を全部入れた」とイエスが細かくおっしゃっている点に、もう一つの教えがあると思います。旧約聖書の「列王記」(上)にこれとよく似た話があります。それは、エリヤが主の言葉に従ってシドンのサレプタに行った時のことです。町の入口で一人のやもめが薪を拾っているのに出くわし、「パンを一切れ」と頼みます。しかし、彼女は「壺の中に一握りの小麦粉と、甕の中にわずかな油があるだけです。わたしたちは、それを食べてしまえば、あとは死ぬのを待つばかりです」と答えます。

しかし、結局、そのやもめは、生きておられる神を信じ、その預言者(「神の人」と呼んでいる)エリヤを信じて、その頼みに素直に従いました。レプトン銅貨を捧げたやもめも、生活費の全てを投げ入れたのですから、その後は主に委ねようと考えたに違いありません。ここに学ばねばならない事があると思います。それは、双方共捧げた物はささやかですが、主なる神を愛する心、精神、思いは純粹で深く、イエスの説かれた「第一の掟」(マルコ12:29～31)に適うものとなっているのではないのでしょうか。一筋に主なる神を敬い、その主に委ねるという気持ちに一片の疑いもありません。

共観福音書には、それぞれ「ナザレで受け入れられない」という記事があります。ナザレで話されているイエスはヨセフの子・イエスではなく、「神の子」であるイエスなのですが、人々はこれを理解できません。自分たちの経験から「ヨセフの子・大工の子・イエス」として見ている為、素直にその教えを受け入れることが出来ませんでした。そこで、マタイでは「人々が不信仰だったので、そこではあまり奇跡をなさらなかった」と書き、マルコでは「そこでは、ごくわずかの病人に手を置いていやされただけで、そのほかは何も奇跡を行うことができにならなかった、そして、人々の不信仰に驚かれた」とあります。ルカでは「預

言者は自分の郷里では歓迎されないものだ」と発言し、こともあろうにイエスを町が建っている山の崖まで連れて行き、あやうく突き落とそうとさえしたと書いています。

これらに共通しているのは「信仰のないところでは、神・イエスでさえ奇跡を行う事が出来ない」(なさろうとしない)ということではないでしょうか？

現代の科学は、宇宙に飛び出し、深海に潜り、自然界の仕組みを解明しつつありますが、最先端の科学者が言っている通り、それは氷山のほんの一角です。「一端を知れば謎はさらに深まる」とさえ言われています。「宇宙の果ての問題」「ブラックホール」「宇宙の始まり」、もっと身近な、地球上の深海の生物の生態。いや身の回りの病気についてさえ解明できないことが多々あるのが実情です。

にも拘わらず、現代人は、ほんの僅かな科学の成果を得て、それを根拠に「科学的にそんなことはあり得ない」と声高に叫び、神を否定し、神を貶めてはいないでしょうか。私たちが神を、畏れをもって信じ敬い、その愛を感謝をもって受け取ることこそが一個人の幸せにもつながることなのだとということを学びたいものです。